

29 関場不二彦の事蹟(二)

—愛知医専赴任事件に関する新資料—

○吉田⁽¹⁾信・島田⁽²⁾保久・津田⁽³⁾晴美・犬山⁽⁴⁾征夫・松木⁽⁵⁾明知

東京大学スクリパ外科で関場不二彦と医局生活を共にした土肥慶蔵は「仮りに理堂博士をして長く鵬翼を北溟に収めしめず、早く凶南の計を成さしめたならば、斥鷃は悉く影を潜めて、中原の鹿は彼の攫取するに任せたかも知れぬ」と関場を評している。

最近、関場自身が所蔵していた「大正五年六月 愛知医専赴任事件 青山胤通先生推薦」と題する文書を発見した。その中には電報、返電の草稿など従来知られていなかった事実を物語る貴重な史料が入っており、それらを紹介すると共に二、三の考察を加えたい。

これらの文書は縦二十九糎、横二十三糎の和紙の袋に入っており、袋の表には文書名が記述しており、その左

端に「大正五年六月 愛知医専赴任事件 青山胤通先生推薦」と記述している。その中の書類の一つが中央に「愛知事件」と大書した封筒で、中に電報と返電の草案原稿が入っている。

これによると、大正五年(一九一六)六月二十四日付で青山胤通東大教授から関場宛の電報で、

「愛知専門学校長及び病院長を引き受けられたし 諾否至急返まつ」

翌二十五日関場から青山教授宛に

「お引き受けする 後片づけ是非四月かかる 如何」と就任を受諾している。

翌二十六日青山教授から関場宛の電報で、

「お引き受け謝す 学校の事情一日も早く決定発表の必要あり この際至急任命を受け 一応休暇になり次第 後片づけに帰り 暑中休暇終了前 更に赴任することできぬか 返 青山」

と早急に任命を受けるよう薦めている。同日折り返し関場から青山教授に、

「どうしても四ヵ月の猶予なくては お引き受けでき

ぬ」

一日おいた二十八日青山教授から関場宛に、

「電見た　ともかく直接協議したきにつき　至急上京

ありたし　いつ発たるるか返　青山」

と直接話し合うことを推めたが、一日おいた三十日関場

から青山教授宛に、

「ご配慮千万かたじけなし　この度親族協議　お断り

することに決定す　委細文」

と辞退する旨の電報を打った。

これらの電文は東大青山胤通教授から愛知医学専門学
校長兼病院長に関場不二彦を推し、その就任を勧める内
容のもので、この件については従来から憶測の域を脱し
なかつたが、これらの電報により事実であったことが明
白となった。ただ残念なことは断つた理由が不明であり、
今後も史料の発掘に努めていきたい。

(1)札幌市吉田病院 (2)札幌市
(3)北海道大学医学部耳鼻咽喉科 (4)弘前大学医学部麻酔科

30 維新を生きた村医者 of 生涯

—津下精斉の場合—

津 下 健 哉

精斉(来吉)は津下古庵の長男として文政九年岡山市沼
で生れる。鼎甫、龍、猪三郎、ていの五人兄妹。幼にし
て穎敏、天保五年、沼本寿庵の弟子となり嘉永二年迄医
術修業し郷里に帰る。後再び金川の難波抱節に医学を学
ぶも程なく抱節の紹介で適塾に入門。安政五年七月、三
三歳の時で弟鼎甫に遅れること六年。

適塾では石井宗謙の長男久吉と同期入門。久吉の入門
は同年四月・十九歳。安政六年九月の塾生の成績表があ
り、その六等に精斉の名が、三等に石井久吉の名が見え
る。安政六年九月は精斉入門して一年二か月で三四歳の
彼としては良成績。しかし久吉はずばぬけた成績で、当
時洪庵が宗謙に送った手紙に「久吉様日又一日御進歩一